



# 筑紫女学園大学リポジット

Joint Research on the History and Current Situation Regarding Issues of Health, Medicine and Welfare of Elderly People Living on Ioujima Island

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 直樹, 田中, 孝明, OGAWA, Naoki, TANAKA, Takaaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/300">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/300</a>

離島生活高齢者の保健・医療・福祉をめぐる現状と課題  
— 長崎市伊王島における高齢者生活史共同研究を手がかりに —

小川直樹・田中孝明

Joint Research on the History and Current Situation Regarding Issues of Health, Medicine and Welfare of Elderly People Living on Ioujima Island

Naoki OGAWA and Takaaki TANAKA

目次

- 1 はじめに (分担執筆者 小川直樹以下、氏名のみ)
  - (1) 研究目的
  - (2) 研究の視点と方法 (田中孝明)
- 2 長崎市伊王島の概要
  - (1) 伊王島の地理と交通 (田中孝明)
  - (2) 伊王島の歴史
  - (3) 人口構造 (小川直樹)
- 3 伊王島の保健・医療・福祉をめぐる現状とその問題点
  - (1) へき地医療をめぐる問題 (田中孝明)
  - (2) 高齢者支援の実施体制
- 4 おわりに (小川直樹)

## 1 はじめに

### (1) 研究目的

1990年代の社会福祉基礎構造改革、2000（平成12）年に実施された介護保険制度および近年の制度改正、そしてその背景にいわゆる「平成の大合併」が進行したところのわが国の政策、特に社会福祉制度は大きな転換点を迎えてきた。こうした時代に呼応して、もっとも基礎的で実践力

が試される生活福祉のあり方にも新たな対応が迫られていると考えられる。転換点を迎えている地域、特に離島に暮らす高齢者の生活福祉の現状と課題を検討するに生活史共同研究を実施した。

本研究は、九州における高齢者の生活研究として、九州家政学総合研究会の研究グループが取り組む第3回目の共同研究である<sup>1)</sup>。九州地区は従来より、社団法人日本家政学会の生活経営学部会と家政学原論部会の会員が合同で九州家政学総合研究会として活動している。活動は従来行ってきた一連の研究の流れに沿い、2007（平成19）年度からは自然も歴史も生活もそれぞれに異なる相貌をみせる地域「九州」・「高齢者」をキーワードとする。研究会メンバーの生活地が九州であることから、「九州」という特性をいかした高齢者の生活についての共同研究を開始した。

これまで長崎市高島を中心とした現地調査を実施してきたが、今回の調査対象地は、長崎市伊王島の「離島」である。伊王島を選定するにあたっては次のような理由がある。まず、いわゆる「限界集落」といわれる状況になる地域および離島とは、およそどのような個人的・社会的状況に暮らすのか。また、長崎市へ合併された伊王島（西彼杵郡伊王島町から長崎市へ2005年1月に合併）という状況による高齢者の生活変化を捉えることで、将来的な生活福祉の基盤見通しが立てられると考えたからである。

本論文では、先述した理由をもつ長崎市伊王島を例に、人口減少と高齢化が進む離島における高齢者の生活史をたどるなかで、特に高齢者の生活保障として必要不可欠な保健・医療・福祉の現状を調査・分析することにした。

## （2）研究の視点と方法

2007（平成19）年3月・9月・12月、2008（平成20）年3月・9月、2009（平成21）年3月と、高島の高齢者への聞き取り調査を含め、これまで6回の現地調査を行っている。そして、2009（平成21）年9月、2010（平成22）年3月と、伊王島の現地調査を加えている。

研究方法としては高齢者に対する面接調査が主であるが、高齢者の生活環境情報を得るために、現地の公的機関、高齢者施設、近隣・商店などを訪問調査した。

特に本論文では保健・医療・福祉をめぐる視点から、伊王島の高齢者を取り巻く生活環境の現状とその課題を中心に考察する。

## 2 長崎市伊王島の概要

### （1）伊王島の地理と交通

#### ① 地理

伊王島は伊王島と沖ノ島の2つの島からなる。両島は1911（明治44）年に橋で結ばれた。伊王島地区は、長崎市の南西約10キロに位置する。2つの島は総面積が2.26平方キロメートルあり、2010（平成22）年に竣工予定の「伊王島大橋」が香焼町と伊王島町の沖ノ島馬込間500メートルに架けられる。

交通に関して、島外の交通は船であり、高速船、高速旅客船、海上タクシー、フェリー等がある。高速船「コバルトクイーン」(旅客定員268名)は長崎・大波止港から伊王島港に1日11便(大人片道650円)就航している。所要時間は約19分である。高速旅客船「竹島丸」は1日7便、長崎・大波止から高島港までであったが、現在は運休中である。香焼から高島間にも海上タクシー「美津丸」が1日4便(大人片道600円)就航している。

## ② 交通

### ア) 島外

島外への交通は高速船、高速旅客船、海上タクシー、貨物フェリーがある。定期航路として高速

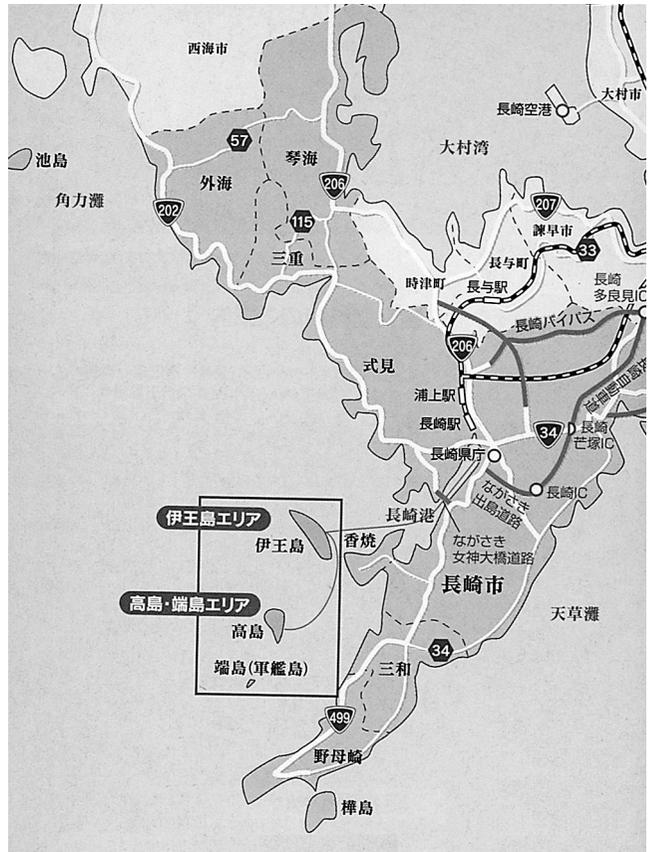


図1 長崎市伊王島の位置



写真1 伊王島の全体図(伊王島港の看板より・撮影者 田中孝明)

船「コバルトクィーン」(旅客定員268名、長崎汽船)は長崎市(大波止港)から伊王島港に1日片道11便(大人片道650円)運行し、所要時間は約19分である。高速旅客船「竹島丸」(高島海上交通)も1日7便(4月～9月は8便)あるが、現在は運休中である。香焼から高島までにも海上タクシー「美津丸」(盛和産業)が1日4便(大人片道800円)運行し、所要時間は約10分である。そのほか、「高島・伊王島貨物フェリー」(富川兄弟商会)も運行し、香焼町の本村港から出航し、平日および不定期航路の予約制であるが、車と運転手のみ乗船できる。

### イ) 島内

島内の交通はバス、自家用車、自転車、自動二輪車である。公共交通機関は島内を循環するコミュニティバスがあり、高速船と連動して運行している。1日17便(土日祝日18便)で運賃は大人1回100円となっている。島内の大半が坂道なので、循環バスは高齢者の足となり、船着場や診療所、行政センターへ行く際に利用されている。そのほか、緊急を要する場合は救急艇が利用できる。

### (2) 伊王島の歴史

伊王島の歴史について概略を以下にまとめる。

1177(治承元)年	俊寛、成経ら鹿ヶ谷の密議により捕えられ伊王島に流される。
1710(宝永7)年	石炭採掘が事業化される。用途は製陶や製塩の燃料である。
1868(明治元)年	トーマス・グラバーと佐賀藩の合弁により高島炭鉱を起し、イギリス人技師モーリスを雇い入れた後、イギリスの採炭機械を導入し、堅坑開発に着手した。これが日本炭鉱史上画期的な北溪井坑で翌年の明治2年4月から本格的な採炭が始まる。
1870(明治3)年	江戸条約の規定により、日本最初の灯台の1つが建てられる。
1889(明治22)年	町村制施行で伊王島と沖之島が合併し、伊王島村となる。
1962(昭和37)年	最盛期(世帯数1748、人口7300)に町制を施行し、伊王島町となる。
1972(昭和47)年	日鉄伊王島炭鉱閉山、人口が減少する。日鉄鉱業所病院を借り受け、町営診療所が開所される。
1984(昭和59)年	伊王島灯台公園完成、船津生活館完成。
1992(平成4)年	高齢者生活福祉センター竣工。
2005(平成17)年	周辺5町(香焼町、高島町、野母崎町、外海町、三和町)とともに長崎市に編入される。

### (3) 人口構造

伊王島の人口推移は図1のとおりである。日鉄伊王島炭業所の開業により(開業機関31年間)一時期は7千人を越すほどであったが、閉山後は急激に減少している。江戸時代には戸数200戸程度の漁業と農業の島であった。2009年8月末現在、伊王島の人口は788人である。全人口788人のうち、65歳以上の高齢者の割合は男性が138人、女性が249人を占めている。

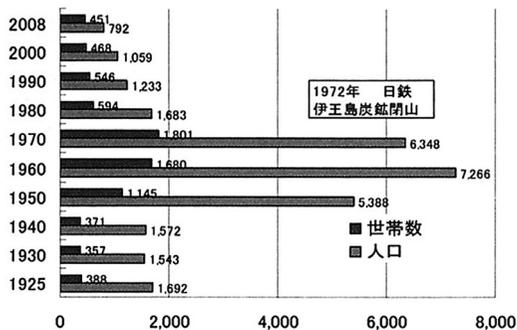


図2 伊王島の人口と世帯数の推移

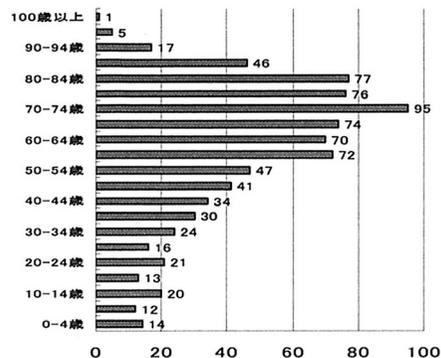


図3 伊王島の年齢別人口数（2008年）

### 3 伊王島の保健・医療・福祉をめぐる現状とその問題点

#### (1) へき地医療をめぐる現状

伊王島の医療供給体制の中心は、長崎市伊王島国民健康保険診療所である。医師1名が一般の病気・療養のほか、救急患者の対応や町民の健康管理指導にもあたっている。なお、特別に治療を要する急患の場合には、行政センターから救急艇が準備され、島外の長崎市内の医療機関へ移送される。救急艇の出動回数は月平均3、4回、年間約50回程度といい、決して少なくない頻度で島内の住民が移送されている。

島外の医療機関へ行く場合には当然、唯一の交通手段である船の交通費の負担問題があげられる。伊王島大橋の完成によって、香焼地区へ船を使用せずに上陸することは可能になるが、かかりつけ医の医療機関が近くなるとは限らない。現在、通院している住民の多くは船を利用し、長崎市内の医療機関に通っていると思われる。伊王島大橋の完成によって、離島振興法の適用されない場合、住民に対する生活上の不利益がないよう行政上の措置が必要になってこよう。

#### (2) 高齢者支援の実施体制

##### ① 入所型施設をめぐる現状

伊王島の福祉サービス基盤体制の中心は、長崎市伊王島生活支援ハウスである（写真2参照）。生活支援ハウスは、1990（平成2）年度に過疎地域における「高齢者生活福祉センター」として創設され、その後、過疎地域の限定を廃止し名称も「生活支援ハウス」となった<sup>(2)</sup>。目的として、老人デイサービスセンター等に居住部門をあわせ整備し、高齢者に対して、介護支援機能、居住機能及び交流機能を総合的に提供することにより、高齢者が安心して健康で明るい生活を送ることができるよう支援することである。

長崎市伊王島生活支援ハウスの入所については、以下の要件があげられる。

- 1) 長崎市に住所を有し、原則として60歳以上の者であること。
- 2) 一人暮らしの者、夫婦のみの世帯に属する者又は家族による援助を受けることが困難な

者であること。

3) 高齢等のため独立して生活することに不安がある者であること。

「長崎市伊王島生活支援ハウス条例3条」

現在の運営は、長崎市社会福祉協議会伊王島支所が行っており、施設の1階にデイサービスセンター、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所があり、2階部分が居住部門となっている。現在は8世帯が2階で生活を行っている。入居部屋は11部屋あるが、入所要件を満たす者でなければ施設の入所は認められないことを踏まえると、伊王島の高齢者が施設入所を希望する場合には、島外の施設に入所せざるをえない現状である。



写真2 長崎市伊王島生活支援ハウス (撮影者 田中孝明)



写真3 NPO法人の事業所 (撮影者 田中孝明)

## ② 在宅支援の基盤

伊王島の在宅福祉サービスについては2つの事業所が存在する。1つは、長崎市伊王島生活支援ハウス内に長崎市伊王島地区老人デイサービスセンター、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所の3つをかまえる長崎市社会福祉協議会伊王島支所である。デイサービスセンターの利用定員は30名となっており、月曜日から金曜日まで営業を行っている。

もう1つの事業所は、NPO法人が介護保険事業ではデイサービス事業を中心に運営を行っている（写真3を参照）。当該事業所ではほかにも、福祉有償移送サービスや介護保険では対応できないサービスを低料金で提供する生活応援サービス、親の仕事や急用等で子どもを預かる保育システムとして子育て応援サービスを提供している。

伊王島で受けることが可能な介護保険サービスの種類を整理すると以下のようになる。

### 1) 居宅サービス

#### ○ 伊王島で受けることができるサービス

訪問介護（介護予防）、通所介護（介護予防）、福祉用具貸与・購入費支給（介護予防）、住宅改修費支給（介護予防）

#### ○ 島外で受けることができるサービス

短期入所生活介護、短期入所療養介護

### 2) 施設サービス

#### ○ 伊王島で受けることができるサービス

なし

#### ○ 島外で受けることができるサービス

介護老人福祉施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設

### 3) 地域密着型サービス

#### ○ 伊王島で受けることができるサービス

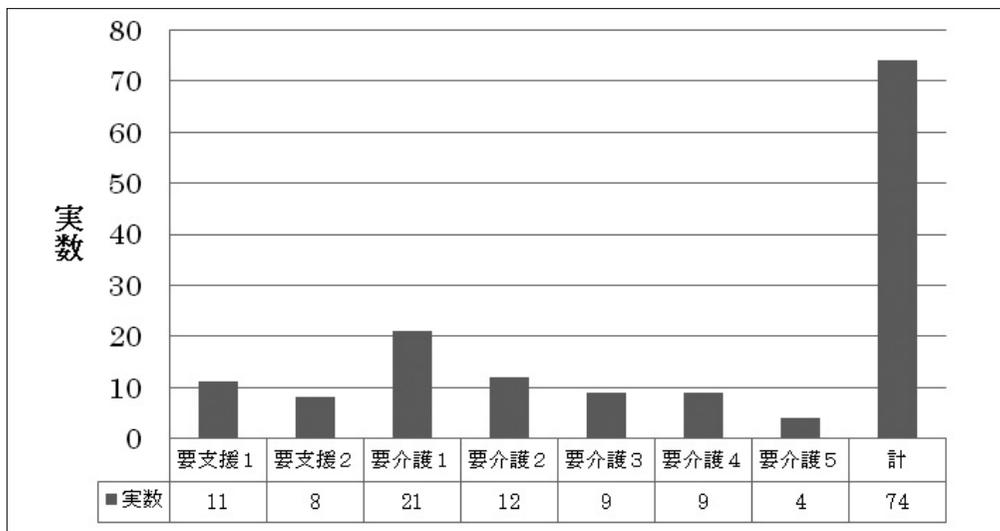
なし

#### ○ 島外で受けることができるサービス

認知症対応型通所介護（介護予防）、小規模多機能型居宅介護（介護予防）、認知症対応型共同生活介護（介護予防）

以上のようにみていくと、島内で受けることができる在宅サービスについて、島外でのサービスに比べると明らかに少ないといわざるをえない。この理由には在宅サービスのニーズが少ないことが考えられる。図4では2009年6月末現在の伊王島の要支援・要介護者をあわらしている。この図をみてもわかるように、現在は比較的介護度の低い高齢者が多い。しかしながら、介護保険制度の政策方針が介護予防に重点を置かれたとはいえ、要介護高齢者の増加は否定できない。ということは、伊王島での在宅サービス供給量も当然増えてくることは間違いないであろう。

介護サービスの供給量に関して、市町村によって格差があることはこれまで指摘されてきたこ



(2009年6月末 長崎市福祉保健部調べ)

図4 伊王島の要支援・要介護者

とではあるが、離島という地理的条件だけで、同じ市町村内で受けることができるサービスとそうでないサービスが存在することは問題である。



写真4 馬込教会 (撮影者 田中孝明)



写真5 馬込教会信徒会館 (撮影者 田中孝明)

### ③ 高齢者のつながりを支える拠点

伊王島には2つのキリスト教会(馬込地区と大明寺地区)が存在する。その1つであるカトリック馬込教会(写真4参照)では、早朝ミサが毎日6時半から行われており、日曜ミサには8時から平均して150名の信徒が参加をしている。また、馬込教会では、地域貢献活動として、8月の伊勢エビの大漁祈願祭、9月の敬老会のほか、結婚式や葬儀も執り行っている。

このように伊王島では教会が住民の生活上、重要な役割を果たしているのである。教会で行われる定期的な集いを通して、高齢者同士のつながりが維持され、地域の住民活動にとって必要不可欠な拠点として位置づけられている。また、住民同士が教会に集うことによって、地域の高齢者への目配りの機能を果たし、住民自治の活動にも大きく寄与しているのである(写真5参照)。

## 4 おわりに

全国的にみても離島地域において、保健・医療・福祉の現状はどれもサービス基盤体制が不足し、都市部と比較すれば厳しい現状と言わざるをえない。また、若年層は雇用創出の場に恵まれず島外へ職を求め、島内には高齢者を中心とした住民が生活することになるのである。

本論文では、離島地域である伊王島に暮らす高齢者の生活環境を中心に、長崎市と合併をした後、高齢者の生活問題にどのような影響を及ぼしたのかという視点も踏まえて若干の考察を行った。市町村合併に伴い、伊王島は長崎市に吸収される形となった。介護保険サービスに関しては、長崎市が実施しているサービスがあるにもかかわらず、島内では実施されていないサービスが少

なくないことが明らかになった。これは同じ市町村に住む被保険者の保険料負担からみると、伊王島の高齢者にとってサービス受給権がおろそかにされているといっても過言ではない。

今後、伊王島に暮らす高齢者の保健・医療・福祉をどのように充実させていくかという問題は、そこで生活する者にとって喫緊の課題である。伊王島大橋の完成によって、離島でなくなるのがどのような生活環境の変化を生み出すのか、これから見守っていきたいと考えている。

#### 注)

- (1) 第1回目の共同研究成果は『高齢化社会と家庭生活—九州地区における現状ならびに課題と提言—』(九州大学出版会、1987年)、第2回目は『高齢者生活文化の創造—人生100年を生きる—』(九州大学出版会、1995年)を参照。
- (2) 全国厚生労働関係部局長会議資料(老健局)2005年1月20日。

本研究は、九州家政学総合研究会の共同研究成果の一部である。

代表：小川直樹(筑紫女学園大) 事務局：後藤直子(香蘭女子短大)

共同研究者：赤星礼子(佐賀大)、川口恵子(尚綱大)、谷村賢治(長崎大)、花崎正子(九州共立大・非)、財津庸子(大分大)、米村敦子(宮崎大)、田中孝明(尚綱大)

併せて本研究は、平成22年度科学研究費補助金(基礎研究C)研究課題名『離島における高齢者生活支援ネットワーク形成の研究』(課題番号21500735)研究代表者 佐賀大学文化教育学部 赤星礼子教授に伴う現地調査の研究連携協力者として、その結果の概要を発表したものである。

(おがわ なおき：人間福祉学科 教授)

(たなか たかあき：尚綱大学短期大学部 准教授)